

マザーテレサの「愛」という仕事 より

1910年 マケドニア（旧ユーゴスラビア）のアルバニア人家庭に生まれる。
18才でインドにわたり、カトリックの修道女になる。

女子高の歴史、地理の教員、その後校長。

1948年（37才）派遣伝道師の身分の除籍をローマ法王に申請。
修道院の外に住んでスラムで働く許可

1952年、路上で死にそうになっている人を連れてきて、最期をみとる施設
「死を待つ人々の家」を開設。

1979年、ノーベル平和賞受賞

1997.9.5（87才）死去



マザーテレサの家とは？

正式名称「Missionaries Of Charity」（神の愛の宣教師会）。1948年、修道女を辞めてカルカッタのスラム街に移り住み、貧しい人々や孤児、ハンセン病患者らの救済活動をはじめた。1950年、自ら修道会を設立し、インド国籍を取得。このころからマザー・テレサと呼ばれる。テレサは孤児院、ハンセン病患者の医療施設など次々に貧者・弱者救済の場を広げ、現在は世界200以上の都市に施設を持ち、3000人以上の修道女、支持者が活動する。

カルカッタでの、ある晩のことです。マザーたちは路上で病人を見つけました。その中の一人の女性が特に重症だったのですが、彼女の体は、虫や蛆に覆われていたのです。

私は愛情のすべてを注ぎ、できる限りの世話をしました。
そしてベッドに寝かせてあげた時、彼女は私の手を取り、美しく微笑んだのです。

こんなに美しい笑顔、私はそれまでに見たことがありませんでした。

「ありがとうございました」

彼女はそうひとこと言って、静かに息を引き取ったのです。

そんな彼女の死を目の当たりにして、私は自分に問いかけてみました。

「私が彼女だったら、どうだろう？」

私は正直に答えを出してみました。

[人の気をひこうとして痛いとかお腹が空いたとか死にそうだとか言ってしまうかもしれない]
彼女は私に愛をくれました。彼女は、私が彼女にしてあげた何倍ものものを、与えてくれたのです。

私たちのところにいるのは、こういう人々なのです。

この貧しくも美しい人々は、何も私の所にだけいるのではありません。誰の側にも必ずいるはずですよ。

孤独な人はどこにでもいます。あなたはそのことに気づいているでしょうか？

マザーは真実な人でした。

その信仰に基づき貧しい人々の中のいちばん貧しい人々を愛し続けた生涯でした。

彼女の大きな仕事の一つであった[死を待つ人の家]は、人間のこの世の人生の、最後（死）の瞬間を、尊厳を持って迎えてほしい（迎えるべきである）、という彼女の真の愛（信仰）によって始められ、今も後継者たちにより実践されているのです。



「死を待つ人の家」でミサが行われたときの様子

死を待つ人の家とは？

1952年に、路上で死にそうになっている人を連れてきて、最期を看取るための施設として設立。インドで結核、栄養失調、マラリアなどの大病を患うと、貧しく医者に行けない低カーストの人間の場合、回復する見込みの無い人間を養う余裕はない、一緒にいると感染する可能性が高いという理由で、家族によって路上に棄てられます。インドの中でも最も貧しく傷ついた人々に、「せめて死ぬときくらいは人間らしく」との思いで設立したとされています。

今、この瞬間幸せでいましょう。それで十分です。

その瞬間、瞬間が、私たちの求めているものすべてであって、他には何もいらぬのです。今、幸せであるようにつとめましょう。

他の人をあなたより貧しい人々も含めて愛しているのだということ、行動によって示すことで、彼らを幸せにすることができるのです。

たくさんの方が必要なわけではありません。

ただ、微笑みかけてあげるだけでいいのです。

誰もが微笑むようになれば、世界はもっと素晴らしい場所になるでしょう。ですから、笑って、元気を出して、喜びなさい。

神はあなたを愛しているのですから。

彼女には多くの寄付（お金や物）や賞金（ノーベル賞・1979年《自分が受けるのではなく、彼女の言う、貧しく美しい人々が受け取るのなら、と受賞したのです》等）が入りましたが、それらのすべてを、彼女の愛する貧しい人々のために使っていました。

彼女は、生涯を通じて、日常的に自分自身のものと呼べるものは、聖書等の他には、洗濯用の一つのバケツと数枚の身に着けるサリーと素足にはくサンダル等以外何一つ持っていなかったのです。貧しい人々の中で、同じように貧しく生き抜いた人でした。

（彼女に従ったシスターやブラザーたちも、同様に、家族も財産も地位も名誉も、すべてを捨てて、無一物でその生涯を捧げているのです。）

ピースサポート学習 資料3